

肝機能検査：異常値を解釈するために必要な基礎知識

持田 智 (埼玉医科大学 消化器内科・肝臓内科)

大部分の肝疾患は、その定義、診断基準が病理組織学的に規定されている。このため肝臓病領域における診断学は、血液などを利用した検体検査によって、肝の組織所見を推測することが求められる。このため正確な診断には、肝の構造と機能を理解することが必須である。

肝機能検査は、① 成因に関する検査、② 肝壊死の程度を反映する検査、③ 肝機能を反映する検査、④ 胆汁鬱滞に関する検査、⑤ 肝疾患の合併症に関する検査に分類される。これらのうち、成因に関する検査は肝炎ウイルスに関する新たな知見が短期間に集積し、各種遺伝子検査が導入されて、専門医以外には理解が困難な領域になってきている。また、最近ではヒト遺伝子に関する SNP 検査も、抗ウイルス療法の効果を予測する目的で、先進医療として混合診療の基で測定することが認可されるに至った。さらに、肝癌マーカーに関する検査も新たな測定法に関する検討が進められており、今後は偽陽性例の扱いが変化すると推測される。

本セミナーでは、肝の構造と機能、肝炎ウイルス、肝癌およびヒト遺伝子に関する新たな知見を紹介し、これらが肝機能検査として臨床の現場でどのように利用しているかを概説する。